

# 日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

## 研修報告書 (2015年度 助成者)

作成日 2015年11月1日

氏名 (フリガナ)	五十嵐 良恵 (イガラシ ヨシエ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2015年10月11日 (日) ~ 10月17日 (土)
所属機関名 身分	東京共済病院 手術室 主任

今回この研修に参加して、まずアメリカのヘルスケアシステム、病院のシステムの違いに驚いた。保険システムが根本的に違うことは知っていたが、アメリカも保険危機を迎えており政策が立ち上がっていること、日本は簡単に病院に来てしまうことが問題だが、アメリカではなかなか病院に受診しない上に、肥満などのリスクを抱えている人が多いため、救急搬送された患者が重症化するリスクが高いことを学ぶことができた。病院のシステムとしては、マグネットホスピタルというシステムを学び、驚きと日本との圧倒的な違いを感じることもできた。マグネット認定を受けるために、全部署が一体となって取り組んでいること、そしてその取り組みがスタッフレベルにしっかり伝わるよう掲示物が各部署にあたりと工夫をして伝わっていることが、見学だけで伝わってきた。日本で考えると病院機能評価が思い浮かび、自分の病院でのことを考えたが、主任以上の人が関わりスタッフには「面倒なこと」としか伝わらないような取り組みであること、マニュアルや同意書を整備する、といったような体裁にばかり意識がいつているように感じた。また、大きく違うと感じたのは、マグネットは看護の質の評価が中心で、看護が評価され、患者も看護の質で病院を選んでいることだった。日本では、看護の質を表すシステムはなく、医師や設備、名前などで病院を選んでおり、看護師も良いほうがいい、7対1の方がよいくらいの認識しかないと私は思う。看護師のレベルの違いも大きかった。大学で学生が行っているシュミレーション学習には、小児から成人まで様々な状況設定の下、臨場感あふれる学習をしていた。手先の看護技術だけでなく、自分でその状況から考えてどう行動するか、患者だけでなく家族への声かけまで、具体的に学んでいた。病院に新人看護師として来たときには、日本では3年目の看護師でもかなわないレベルではないかと感じた。今の日本は、学生時代に人間に何も看護技術を実施しない方向に進んでいるため、このようなシュミレーション学習を全学校統一して行う必要があると感じた。看護師になってからは、専門職としての責務である自己研鑽を自主的に行いながら、プライベートと仕事の区別がしっかりしており、日本の現状との違いが大きかった。また、病院内の看護業務の分業化と機械化が進んでおり、看護師が疲弊しないで看護に専念できる現場であること、夜勤も日勤とほぼ変わらない看護師の人数、本人のライフスタイルに合わせたシフトを選択できること、長期休暇が取れることなど、とてもうらやましく夢のような職場と感じた。

様々なアメリカの現状を知ることができ、日本との違いや見習わなければいけない部分を自分なりに考えることができた。部署の取り組みをスタッフみんなが共有できるような工夫、看護業務の分業化をもっと進めることは自分でも取り組めることなので、今回学んだことを生かして、実践につなげていきたい。

研修全体を通して、現地で関わってくれたPSUのジェフ氏、PSU関係者のスタッフの方々、通訳の方も、とても親しみやすく、安心して過ごすことができた。参加者の勤務地や年齢は様々だったが、職業が同じであるため自己紹介から会話はすぐに広がり、厳しいスケジュールの中、楽しく学びながら過ごすことができた。